母校　中央大学

総長・学長
永井（ながい）　和之（かずゆき）

新入生諸君、君たちの母校となる中央大学は、諸君の入学を心から歓迎しています。

諸君が入学した中央大学は、現在いわゆるロースクールやアカンテイングスクール、そして、ビジネススクールといった専門職大学院をはじめ、既存大学院や研究所といった高度の研究教育機関、そして六学部といった陣容を整備している総合大学であります。さらには、理工学部では、都市環境学科を設ける計画を進行中でありますし、その他にも、周辺の医学系大学との連携計画や、複数の地方国立大学との連携などを進めている所であります。文系学部でも、定員再配分による新学部構想や、学部間の連携を強めて新しい分野の創造など、改革を検討しているところです。

このように中央大学は、今まさに進化を遂げつつある大学です。これが君たちの母校となる中央大学の姿です。

新入生諸君！　諸君の入学した中央大学はこのように、今、新たな新世紀を力強く歩み出しています。それは、この豊かな地球を次の世代に、より美しく、平和で文化的なものとして引き継ぐという歩みでもあります。地球の豊かさとは自然環境から文化的環境までも含んだものであると思います。

そして中央大学のキャンパスを、このような目標に共鳴する学生が集う場にしたいと考えています。そこで新入生諸君にも、それぞれの場において、全力で学生生活を充実させていくことを望みたいと思います。なぜならば、それが諸君の叡智をもって、母校中央大学の新しい伝統を築いていくことに参加することになるからであります。

このように現在では総合大学としての陣容を誇っている本学も、明治18年に英吉利法律学校として創立されました。そして、２０１０年には１２５周年を迎えます。

この長い歴史の中でも、本学は創立の理念を一貫して重視してきました。その創立の理念とは、「英吉利法律学校設置広告」（郵便報知新聞付録第３７３１号明治１８年７月20日）にも残されています、「実地応用の素を養う」ということです。

それについて、初代校長の増島六一郎博士はその著した『契約法判決例』（１８８７年度講義録）で、イギリスの裁判官が培ってきた法の叡智を学び、事件の事実に対して法を適用する修練を自分で体得することが肝要であると述べています（山崎利男「英吉利法律学校覚書（三）―イギリス法の受容をめぐって―」史学第五二号２１１頁、中央大学文学部紀要２００７・３／３０）。

このような建学の理念は、この１２０有余年にわたる本学の歴史に名を残した花井卓三博士、本学の誇る文化人でジャーナリストである長谷川如是閑翁等といった諸先輩にも引き継がれ、現在においても本学の理念として確認されなければならないものと考えています。諸君も、本学の誇る多くの先輩達を知ることになるでしょう。

新入生諸君、母校となる中央大学のさらなる発展のために、母校中央大学の伝統を守り、そして、新しい世紀に燦然と輝く新しい姿の母校を目指して、みんなで、できる限りの努力をしましょう。　中央大学における学生生活を大事にしてください。

読書を通して、心を磨いて下さい！

法学部長
井上（いのうえ） 彰（あきら）

新入生の皆さん、入学おめでとう。

新入生に対し、われわれがいつも強調していることは、法律学であれ、政治学であれ、答えは一つではないということです。私の専門である英米法から例を挙げてみましょう。もう十数年前のことですが、オレゴン州で、余命が六ヶ月以下と診断された末期の患者は、医師に要請して致死量の薬物を処方してもらい、その薬物を自分で服用して安楽死することができ、他方医師も刑事・民事上の責任を免除されるとする法律案が、住民投票にかけられることになりました。当然激しい論争が起こり、生命の尊厳を強調して、たとえ末期であっても、法律によって自殺幇助や自殺を容認することはできないとする反対論と、プライヴァシーの権利を強調して、末期という条件があれば、死を選択することができるとする賛成論が対立しました。

このような論争に対し、法律学はどのような答えを出すことができるのでしょうか。実は、どちらの立場も擁護できる法律論を組み立てることができるのです。それ故、答えは一つではないのです。それでは、このような問題に直面した場合、われわれは、どのようにして自己の答えを選ぶのでしょうか。法の論理は役に立たず、大げさな言い方をすれば、それまでの人生で培った価値基準に基づいて選択を行うのです。

そこで今皆さんに求められていることは、将来困難な判断をするときに、人々が納得する判断の基となる価値基準を培っておくことです。そのためには、幅広い読書を通じて、社会を知り、歴史に学び、そして他人の経験や考え方を学び、豊かな人間性を育むことが必要です。

学びの再構築

経済学部長
松丸（まつまる） 和夫（かずお）

経済学部へのご入学おめでとうございます。経済学部は、社会と結びつく人の育成を目指してさまざまな改革に取り組んでいます。経済学部を代表して、新入生のみなさんを心から歓迎いたします。

今日、新たに大学生として生活を開始されるみなさんに考えていただきたいことが二つあります。一つは、自分は大学で何を身につけたいのか。二つめは、大学を卒業したら自分はどんな人生を送りたいのかということです。

大学に入学するということは、みなさんご自身はもとより、ご父母やご親族にとっても大きな喜びでしょう。しかし、これから過ごす4年間の大学生活で、何も身につけるものがなかったとしたら大学で学ぶことに何の意味がありましょう。

こんにちまで、みなさんは勉強するということについてどんな考え方をもってきましたか。やれといわれるから勉強する、勉強とは忍耐力の涵養だ、将来の可能性を開く上で必要だ、勉強をおもしろいと思ったことはない等々、百人百様でしょう。それはそれで結構なことだと思います。しかし、大学で勉強するということの本質的な意味は、「みずから課題を発見し、その解を求める」ことにあるのではないでしょうか。これまでの勉強に対する姿勢、勉強の方法を一度根本から見直し、大学での学修について深く考えてみましょう。問題に対する正解らしいものをどこからか探してきて、コピー&ペースト（引き写し）することはいただけません。

人の一生は、学びの連続です。人生において学びに終わりはありません。大学生にふさわしい学びの再構築にチャレンジしてください。

学生生活の心構え

商学部長
石川（いしかわ） 鉄郎（てつお）

商学部の新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

皆さんは今日から中央大学商学部の学生となるわけですが、これからどのような学生生活を送りたいと考えていますか。商学部で学んでみたいと思うこと、あるいはやってみたいと思うことはありますか。何のために商学部に入学したのですか。商学部での学生生活をスタートさせるにあたって、まずは将来の進路などを意識しながら、学生生活の目標についてじっくりと考えてほしいと思います。

学生生活を送るにあたって、自分の将来に思いをめぐらせながら、学生生活の目標を意識することが大切なのは、大学は「社会人・職業人となるための準備の場」という側面を持っているからです。皆さんは、学生生活を通じて、社会人・職業人となるための準備を行なうのであり、自分は将来どのような社会人・職業人になりたいのか、そのためにはどのような学生生活を送るべきなのか、ということを常に意識することが何よりも大切なのです。

しかし、目標を定め、一生懸命努力しても、思いどおりに望みが叶えられるとは限りません。いやむしろ、物事は思いどおりに運ばないことの方が多いかもしれません。人生には失敗や挫折は付き物であり、そのような困難を乗り越えることにより、人間は成長していくのです。同じことは学生生活にもあてはまります。失敗や挫折を恐れず、学生生活を通じてさまざまなことを経験してみてください。大学は「人間としての成長の場」という側面も持っているのです。

最後に、大学は「純粋な学びの場」でもあるということを強調しておきたいと思います。ある目的のための手段としてだけでなく、学ぶことそれ自体の楽しさや面白さを味わうことも、学生生活では大切なことです。知的好奇心を旺盛にして、学問に接してみてください。

皆さんの学生生活が充実したものとなることを期待しています。

勉強はつらいが研究は楽しい

理工学部長
田口（たぐち） 東（あずま）

入学おめでとうございます。今年から理工学部には生命科学科が加わります。これまでカバーしていなかった分野が展開されるので、先端的な研究はもちろんのこと、基礎的な教育においても大きな刺激となり、ますます元気の良い理工学部になることが楽しみです。

さて、大学生になると、自分で決めなければならないことが沢山あるのに気付きます。学生生活の自由度が大きく、自分自身の責任で物事を決めるチャンスが多くなるのです。これは勉強への取り組み方に強く表れます。私たちは、皆さんが科学技術の第一線に参加できる力を身につけることを期待しています。それは遠く彼方に輝いているように思うかもしれませんが、実は近くにあって、手にすることができます。基礎から応用へと続く理工学部のカリキュラムを学ぶことによって、内容を理解できるようになり、私たち教員や大学院生の指導を受けながら、研究に取り組むことになります。卒業研究では、試行錯誤をしながらも、かなりの部分を自分の力で研究を進めるチャンスが得られるのです。単に学ぶだけでなく、研究を通じて「知」を創造する訓練を積み、成果を得る喜びを味わうことによって、将来未知の課題に出会ったとき、それを解決する能力を身につけることができます。

上の事に加えて、私が皆さんに望むのは、自然にしても社会にしても、その中の仕組みに対して、素直に興味を持つこと、自分なりの答えを見出すまでの持続力を身につけること、そして答えに自信を持つことです。そのために、ゆっくり本を読む時間を作ることと、良い友人を作ることを勧めます。是非、そのように成長しつつある先輩諸君の仲間入りをしてください。

万巻の書を読むにあらざるよりは

文学部長
宇野茂彦

新入生のみなさんご入学おめでとうございます。

吉田松陰はご存じでしょう。彼は萩の東はずれにある松下邑に家居したとき、叔父の久保五郎左衛門に乞われて「松下村塾記」という文章を書き、そのなかで「久保先生が子弟をしっかり教育し、俊傑が従って協力したなら、この萩が有名になるであろう、長門の国は西の隅にあるとはいえ、全国に名をとどろかし、周囲の国々さへも驚かすようになるであろう」と述べました。さすがに久保先生も「あなたの言葉は壮大すぎて、かなわん、もう少し現実的な話を」と望んだのに対して、「三つの基準を設け、進徳、専心を上等、励精、修業を中等、怠惰、放縦を下等として、毎月の初めに評価して上げ下げしなさい。皆が上等になるなら、先ほどの遠大な望みも達せられるであろう」と答えている。気宇壮大な理想も日々の課業に専念することが必要なのです。

この塾のために松陰は聯（門の両側に貼る対句）を作りました。その対句の片方に「万巻の書を読むにあらざるよりは、寧んぞ千秋の人たるを得んや」とあります。千秋の人、つまり、千年先までも語り継がれるような大人物になりなさい、そのためには万巻の書を読むのでなくてはならないというわけです。

千秋の人とまでは言いませんが、それぞれに世に立って活躍できる人物であって欲しいと思います。中央大学はこの東京の西のはずれにあるといえども、大東京を見下ろすこの秀麗の地にあって、大いに志を立てて読書し、よき友を得て勉学に励んでください。

未来の自分を築き上げるために

総合政策学部長
横山彰

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

大学は、皆さんの夢をかなえる舞台です。舞台に役者が揃いました。この舞台で、どのような劇が誰のために演じられるのでしょうか。皆さん一人ひとりが、脚本を書き演出をし、主役を演じるのです。個性溢れる役者たちを使いこなす努力も必要になります。恋敵や悪役も登場してきます。ある時ある状況のもとで人びとを動かすには、何が必要なのでしょうか。人は一人で生きることができないとすれば、他者とどのような「つきあい方」をしたら、皆さんの夢を実現できるのでしょうか。そもそも皆さんの夢は、どのような夢なのでしょうか。その夢を実現するために、大学という舞台で皆さんはどう振舞えばよいのでしょうか。

考えるべきことは沢山あります。皆さんは、過去の自分を土台に未来の自分を築き上げるために、この舞台でも、色々な事柄について自分の頭で考え、考えたことを自分の言葉や動作で表現する力が求められます。特に、言語や表情や衣装による表現能力が重要になります。日本語であれ外国語であれ、言語で表現する力を鍛えるためには、できるだけ多く読み書き聞き話す機会を持つ必要があります。表情を豊にするためには、できるだけ多様な経験を積む必要があります。どのような衣装を身に着けるべきかを適切に選ぶには、衣装がもつ社会的な意味づけをできる限り学習する必要があります。すなわち、言語・表情・衣装の自己表現能力を高める訓練をする必要があるのです。

中央大学という素晴らしい舞台で、適切な衣装を身に着けて豊かな言語や表情によって、自分が考えていることを自分なりに表現する力を鍛え、大きく成長して頂きたいと思います。